

都市との交流にこそ 地域の元気の素がある

佐藤 昨年、私たちは、都市農地の利活用をめぐる人々の欲求が大きく変わろうとしている時代の流れをとらえ、「市民と農（農地・農業）の新しい結合」をキーワードとした農と住が調和した新しいまちづくりの取り組みについて、先進事例を集めた一冊の本をつくりました。今年は、地方都市や中間山地域に視点を移し、深刻化する過疎化や高齢化等を背景に、広がっているさまざまな町おこし、村おこしの取り組み事例をまとめています。

長岡市では、今まさに震災復興からの新しいまちづくりに取り組んでいらっしゃいますね。ここ数年、平成の大合併で多くの地方都市が、農村・山間部の深刻な過疎化や農林業の担い手不足、遊休地化などの問題を同じように抱えることになりました。2009年に全国市長会会長に就任された森市長は、こうした全国の市長が抱える問題にも復興を進めるなかで、取り組まれてきたと思います。まずはこれからの地方のまちづくりで大切なことは何か、お話いただけますか。

森 中越地震で一番教訓になったことは、交流が最も大切だということです。現在、合併して長岡市になった旧山古志村を例にすると、震災前は外部との交流が希薄で、まとまりがあった反面、閉鎖的な社会でした。ところが震災をきっかけに、いろいろな人が外から村に入ってきました。これで住民が元気になった気がします。違った価値観をもつ人と付き合う、交流することはすごく大事なことです。「都市と農村の交流」で、何か新しい活力が生まれると感じています。

佐藤 現在、山古志では、地元の住民が中心となって、訪れる人をもてなす食堂を営業するなど、地域の

旧山古志村復興や

『市民との



聞き手

佐藤啓二

(財)都市農地活用支援
センター理事

新潟県の中心的都市として発展する長岡市。しかし平成16年、中越地震で大きな被害を受けた。とりわけ、過疎化などの問題を抱える旧山古志村などの中山間地の被害は甚大だったが、現在創造的復興に取り組んでいる。また、長倉農住組合が「農と住の調和したまちづくり」を実践するなど、本冊子のテーマ「農を活かした町おこし、村おこし」のトップランナーとして先進的な取り組みにも挑戦している。平成21年に全国市長会会長に就任し、806地方都市のリーダーとなった森民夫長岡市長に、地方のまちづくりについてお話をうかがった。

活動が盛んみたいですね。野菜などの直売所も14か所に増えたと聞いています。また、今年、箱根駅伝で初優勝した「東洋大学陸上部」の夏合宿や、同大学の地域計画ワールドワークチームによる研究合宿が行われています。間断なくこれまでの山古志とは全く異質なさまざまなグループが入り、まさに市長の言われる「互いの多様性を認め合う地域の個性や文化の交流」がダイナミックに進んでいるという

印象を受けました。

森 そうですね。これまで山古志では、そういう人たちを受け入れたことはなかったので、若い学生と地域住民が付き合うということは画期的なことです。外からさまざまな人が情報をもってくるので、中山間地の人たちがものすごく刺激を受けて元気になっています。どうして元気になるかということ、自分たちが当たり前だと思っていたことに価値を感じてくれる。たとえば手

長倉農住を支えた 協働』精神

話し手

森 民夫

新潟県長岡市長



作りの山菜料理や漬物をおいしいと喜んでくれたり、棚田を美しいとほめてもらったり。実際、震災をきっかけに、地元食材を使った地元料理を提供する食堂を主婦グループがオープンさせるほか、「トイレを自由に使ってください」と貼り紙をして自宅のトイレを提供する方も出てきました。けっして行政が指導したわけではありません。行政がやるべきは、彼らの自発的な活動をサポートすることだと思っています。

コミュニティがしっかりしているということは束縛も大きい。それが震災を契機に、外からいろいろな人が入ってきて、開かれた地域になった。行政は外から人を呼びこむ機会や交流の場をつくるだけで、あとは自由にやってもらったほうが良いと思っています。

長倉農住組合の 取り組み

佐藤 都市部でもそうですが、まちづくりは住民からの自発的なものでないと長続きしませんね。昨日取材した長倉農住組合のまちづくりも、住民主体の動きを感じます。市街化区域に、営農地区や市民農園を計画的に残すとともに、宅地を造成し、さらに11人の地権者による統一した賃貸住宅団地を建設するなど、住民が主体となった「農と住の調和したまちづくり」が全国の注目を集めています。このまちづくりは、同地区に隣接する広大な圃場整備との調和も考えて計画されており、地域全体のマスタープランとしても農と住の全体を見越したまちづくりになっています。

森 長倉農住組合の取り組みは全国的に評価され、平成20年には国土交通省農住組合功績者大臣表彰を受賞しました。農住組合法は住民が主体ですから、長倉が成功した一番の理由は、地域のみなさんが理事長を中心にまとまっていることだと思います。土地区画整理はまとめ役やコーディネーターが必要ですが、最後は利害のある地主のみなさんが本気を出さないとだめですね。行政はその側面を支えることしかできません。なかには反対者がいたり、事業を妨げる障害が発生しますから、時には市役所が進むべき方向に向け、助言することも必要です。しかし、繰り返しになりますが、最後は地域の方々のやる気だと思います。

また、農業を続けたい人は、今までと同様に続けられる点も、評価できるところです。

長倉地区には、^{なびか しげすけ}並河成資が「水稲農林1号」という稲を開発したことで有名な県の農業総合研究所があります。農家にとって長倉は農業のメッカのようなところですから、営農希望者の声を反映し農業を継続できる環境を残すことはとても大切なことです。

佐藤 そういふところでしたか。いま全国で宅地型の区画整理は、保留地処分で大変苦戦していると聞いていますが、長倉では100%成約しているということに驚きました。

また、大手の住宅メーカーが手がけた賃貸住宅は、社内の優秀プロジェクトとして表彰されたそうで、私が取材したときも県外から同社の視察団が来ていました。

森 農住組合内での協議に、多くの時間を積み重ね、適切な価格を設定したことが100%成約に結び付いたのだと思います。土地区画整理はみんなそうですけれども、最終的には自分たちで売る、責任は自分たちで負う、という覚悟がな

いといけません。

佐藤 農住組合が、土地区画整理事業の手法を活用し、これだけ大規模な土地区画整理を行うことは全国的にも珍しい事例ですよ。また、敷地内には、地域住民が集えるをコミュニティーセンターがありますが、そのような施設を備えている農住組合はあまり例をみませんね。

農住組合法は平成23年で時限となるため、国では、これをどう変えていくか、特にまちのマネジメントや農地保全の方法等を考えているようです。そういう意味でも長倉農住組合はモデルになると思います。

森 農と住が共存するまちづくりは、なかなか難しい面もあり、旧集落との調和も必要ですよ。その点、長倉では理事長を中心にこの問題をよく考え、話し合いを重ね丁寧に取り組んできました。

山古志の復興の場合もそうですが、自分たちでやらなければいけないという局面になると、すごい底力が出てきます。行政が何かやってくれると思っているうちは絶対ダメですね。また、開発したい動機が役所側であって、住民を説得するという開発はうまくいきません。まず、やりたいという地主側の動機があって、そこに行政が入って上手に地権者の気持ちをほぐしながら輪を保つ。そして、励ましながらコーディネートしていくことが肝要だと思います。決してやりすぎないことです。

これからの行政は「市民との協働」が大切

佐藤 農を活かした町おこし、村おこしを進めるうえで最も大切なことは地域からのボトムアップ型の取り組みです。

その点、長岡市では山古志や長倉農住組合をはじめ、各地域でNP



震災をきっかけに、山古志の主婦グループが地元食材を使った料理を提供する食堂をオープン。人気を博している

Oや各種市民団体の活動が大変盛んな印象を受けます。

森市長が日ごろ強調されている「市民との協働」ということと大いに関係があるような気がするのですが、長岡でうまく進んでいる秘訣はどのようなところにあるのでしょうか。

森 地方自治は、「住民自治」と「団体自治」により支えられ、二つの自治が相互作用することで、初めて豊かな地域社会が形成されます。住民自治は市民、コミュニティ、NPOの自発的な活動で、団体自治は議会、首長、各委員会で成り立っています。「市民との協働」を推進するためには、行政が住民自治を歓迎していることを市民に伝えないといけませんね。地方は特に、NPOなどが行政に遠慮する傾向がありますから。おおげさに言うと役所に逆らったら生きていけないという束縛感がある。市長が先頭に立って、「市民力」「地域力」が大切だ！と、言い続けないと、なかなか定着しません。今後、生活に密着したダイナミックな政策を実践するためには、どうしても住民自治が不可欠であり、そのため行政はしっかり下支えを行うことが大事です。

また、長岡には長岡技術科学大学があり、都市計画では日本のなかでも先進地だと思っています。事業の優先順位でも、地主があまり苦勞しない全面買収方式などの開発は優遇せず、土地区画整理のように自分たちでリスクを負い、汗を流すような事業を優先することで、20年間続けています。そのような面で、「市民との協働」の下地が以前からあったかもしれない。

佐藤 ご当地で人づくりを大切にしている精神が、古くから風土に受け継がれているとかがっています。

森 長岡の偉人・小林虎三郎は、戊辰戦争で焦土と化した長岡藩の復興には人材育成が何よりも重要と考え、明治2年に国漢学校を開校。さらに翌年、長岡の窮状を見かねた三根山藩から送られた百俵の救援米を新校舎開校の資金に充て、人づくりの大切さを説きました。その「米百俵の精神」は今も長岡に受け継がれています。長岡藩は戊辰戦争後、「賊軍」の汚名を着せられ、辛い歴史を歩きました。それゆえ、自分たちでがんばるしかない、という強い思いが、「米百俵」の故事を生み、数多くの優秀な人材を輩出することにつながったと思います。



長倉農住土地区画整理組合のコミュニティセンター「あおしの里」

長倉地区の近くに、市民の憩いの場である悠久山公園という大きな公園があります。この公園は大正8年、当時の財界人を中心とした「令終会」の手によって完成しました。面積は約35.77ha、約25000本の桜が植えられ、市民がつくった公園では日本で一番大きいと思います。

また明治から大正時代に、実業家として活躍した野本恭八郎は、自分の尊さに気づき、他人も尊重して幸福な世界を築こうという「互尊独尊思想」を提唱するほか、私財を投じて「互尊文庫（図書館）」を建設して市に寄付し、また財団法人日本互尊社を設立しました。

このように長岡は、もともとボランティア精神が強いまちだと思います。中越地震のときも、被災者たちは全国から応援に駆けつけてくれたボランティアに対して、自分たちの辛い境遇について何ひとつ文句を言わず、ただ「ありがとう」という言葉を返したそうです。そのことに神戸市のボランティアのみなさんが感心していた、と聞きました。自分たちで頑張るのが当たり前だから、何かしてもらったら「ありがとう」なんですよ。

佐藤 全国の市町村で「市民との

協働」が進むためには何が必要でしょうか。

森 長岡市に限らず、時代は確実に「市民との協働」に向かっていると思いますよ。その場合、行政は行政のプロフェッショナルとしての誇りをもたないといけません。市民中心といっても市民のいうとおりにするのではなく、役割分担だと思います。行政は、公平・安全・安心の原則に立つため、住民ニーズがあるとしても思い切った政策には足踏みしてしまう。しかし住民は、自由・自助・冒険で動くため何の問題もなく、自分の好きに実行できます。持ち味の違うものがかみ合うのが協働ですから、行政は、市民が大切にしている部分をうまく引き出し、実現する手段を提供する。それが本当の意味で市民を尊重することだと思います。行政の下請けに市民を使っはいけない、市民のいいなりにしてもいけない。対等であることが大切です。

佐藤 なるほど。ところで、平成23年度に新しくできるシティホール（仮称）は、まさに「市民との協働」を体現する空間になるとうかがっていますが。合併に伴う都市と農村

の交流機能も含まれるのですか。
森 シティホール（仮称）は「市民との協働」の象徴として、平成23年度、中心市街地に誕生します。「ナカドマ（屋根付き広場）」と「アリーナ」、「市役所」が一体になった施設で、市民と行政の垣根を取り払い、市民が自由な発想で、自在に活用できる『にぎわいの拠点』です。市民が身近に感じることができ施設にしたいと思っています。具体的には、議場や総合窓口を1階に設置し、議員が議会で討論している姿や、職員が仕事をしているところを見えるようにする。見えることで相互理解が深まると思っています。

また、合併により9市町村が新たに加わったので、それぞれの地域のお祭りを、「ナカドマ」で披露するというイメージも持っています。山古志の闘牛もぜひやりたいですね。合併する市町村が個性を捨てて一緒になる必要はないと思っています。やはりここでも、「互いの多様性を認め合う地域の個性や文化の交流」がテーマとなっています。

現代社会は徹底的にコミュニケーションが不足していると感じています。自分がいる社会と異質な社会との交流がなくなっていますね。そういう意味では、都会の人が田舎に移り住んだり、訪ねてくるだけでも、お互いに刺激になると思います。

これからも長岡市が「都市と農村の交流拠点」として先鞭つけていくので、将来を楽しみにしてください。

佐藤 いろいろ参考になるお話をうかがうことができました。

今日はお忙しいところありがとうございました。これからもますますお元気にご活躍されることを期待しています。